
次元の狭間にてっ

かもめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

次元の狭間にてっ

【Nコード】

N1182R

【作者名】

かもめ

【あらすじ】

二年前、あかつき紅月 のぞみ希は

”次元変動”にて別次元へと飛ばされた。

別次元と言ってもこちらからは何気ない普通の風景が見える。

しかし、向こうからこちらが見えない。

そんな場所

そんな厨二な世界で希はある少女と出会う。

彼らはこの空間で何をするのか

・・・

episode - 0 (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

episode - 0

「おはよう。」

誰もいない空間でつぶやく。

もうこの空間に離れた。

”次元変動”

この事件が僕の生活を一変させた。

僕にはこの世界が見える。声も聞こえる。

しかし、この世界の人は僕の姿が見えない。

なぜかって？

そんなこと知らない。

あ、でもテレビのニュースによると、何らかの理由で次元を保つエネルギーに異常が起き、少数の人がこの次元に飛ばされたらしい。

僕だってこんな厨二設定信じたくないさ。

でも、神様が厨二病ってことなら納得だ。

episode - 1 〈異変〉

俺の名前は、あかつきのぞみ紅月希。

もう話したが、俺は次元を飛ばされた。

．．文字通り次元の違う場所にいるということだ。

そういえば、最近気づいた事だが、俺には触れることのできるものとできないものがある。

たとえば、床や壁は触ることが出来る。

理由．．．？

そんなの知るか。

今のところ、俺と同じ次元に飛ばされた人には出会っていない。

つまり、一人ぼっちということだ。

さみしいかって．．．？

さみしいに決まってるだろ．．．。

でも仕方ないだろ？

そんな世界なんだよ。なぜかこの次元にいるとおなかもすかない。だから別に苦勞もない。

つまらないだけだ。

ただ、それだけ。

とりあえず外に出てみる。

なんだかんだ言っても俺と同じ次元に飛ばされた人にあいたい。

．．いや、誰でもいい。

話がしたい。

人が恋しい。

家族は毎日目にするからよけいに愛おしい。

何故俺に気づかない。

そうやって家族を責めても意味のないことは分かってる。

そんなことを考えていると、俺は何かにつまづき、勢いよく倒れようとした体をギリギリで起こした。

久々に身に危険を感じた。

この次元に飛ばされて初めて生きようという反応が働いたのかもしれない。

俺は、自分をつまづかせたものが何なのか気になり足元に目をやる。

．．．あれ？

何も無い。

平坦な道路だ。

状況についていけなくなった俺の脳は順番に今の出来事を理解する。

まず、俺は別次元に存在する。

床や道路などは何故か普通に触ることが出来る。

そして、今俺は何かにつまづいた。

しかし地面には何も無い。

．．．理解しようとするればするほど分からない。

心臓の鼓動がはやくなるのを感じる。

この世界で永遠に続くのではないかと思われた”つまらなさ”がなくなるのではないかという期待。

ここでの生活が安定しなくなるのではないかという不安。

さまざまな感情が混ざって緊張という感情に変わる。

「何かあるのか．．．?」

声を出してみた。

．．．返事がない、ただの屍のようだ。

いや、屍すらないけども。

こんなことを考えているとだんだん緊張もほぐれてきた。

俺は何もないところまでつまづいたただけだろうと、当然の納得をする。

幸い、この次元では疲れも感じなければ怪我もしない。

だからもう気にしないでおこつ。

そう思ったそのとき。

既視感をかんじる。

そんなわけがない。

さっきの緊張のせいでおかしくなってるんだ。

俺はこの次元ではありえないこの感覚を否定する。

．．．しかし、それでも無視できない。

俺は、恐る恐る口を開き聞いてみた。

「お前は誰だ．．．？」

episode - 2 〈少女〉

怖い．．．

自分がなにか得体のしれないものに狙われていないか、という恐怖。

．．．返事がない。

聞こえてないのか？

説明し忘れていたがここは新宿区。

周囲の声や音はすさまじい。

今度は声を大きめにして聞いてみる。

「誰がいるのか．．．？」

．．．やはり返事はない。

しかし、既視感が消えることはない。

ここで俺は思考を変えてみることにする。

もしかしたら、俺と同じようにこの次元に飛ばされた人が俺の不思議な行動を見ていたのかもしれない。

いや、むしろそのほうが可能性は高くないか？

．．．まあそれは期待のしすぎか。

しかし、そのパターンだと嬉しいので試してみることにする。

「もしかして、君もこの次元に飛ばされたのか．．．？」

「ふえ！？」

．．．ん？

背後から可愛い声が聞こえた。

しかも、俺のあの言葉に反応したってことは

この次元に飛ばされた仲間・・・？
さっきのつまづいた時より鼓動がはやくなるのを感じる。
俺の経験上あの声に悪い奴はいない。
期待で更に緊張する。
いや、まあ彼女なんて出来たことのない俺の経験上だが・・・。
とにかく、後ろが気になるので自分の勘を信じて恐る恐る振り返ってみる。

.....

・・・可愛い。

何がって？

座り込んで、明らかに俺のことを見ている女の子。

二つくりで何故か制服。

今は目を丸くして、混乱してるかのようにぼーっとこっちを見ている。

困らせたのは俺なので、俺が会話をリードすることにする。

「君には僕が見えてるの・・・？」

自分がこんなどっかのお話の妖精みたいなセリフを言うなんて俺が一番驚いてるよ。

すると女の子は、さらに目を丸くしてゆっくりと尻もちをついた。

少しの間あたふたしていたが、覚悟を決めたのか、口を開いた。

「わ・・・私に言ってるんですか・・・？」
やはり可愛い。

俺は自分の思う最高のかつこいい声で言ってみる。

「うん、君に・・・。」

俺がそういうと少女は少しの間、微動だにせず驚いていたがやがて自分の腕で顔を隠した。

「ん・・・？」

少女の行動の意味が分からなくて思わず疑問の声を出してしまっ
とりあえず、少女が何をしているのか知りたくて少女の顔を覗き込
む。

．．．僕が目にしたのは

涙。

少女は泣いていた。

俺が怖かったのか．．．？

．．．いや、違うと思う。

少女は俺と同じようにこの次元に飛ばされて、ずっと一人で過ごし
ていたんだ．．．。

だからこうして人に会えたのがたまらなく嬉しいのだろう。

たとえそれが見ず知らずの俺でも．．．。

> i 1 9 3 9 1 — 2 5 8 5 <

episode - 3 (困惑)

俺が黙って見守っていると少女は徐々に泣きやみ、顔をあげた。

「あ．．．あの．．．ごめんなさい。わ、わたし．．．びっくりして．．．」

「いいよ、だいたいわかるから．．．。」
やさしく声をかけた。

今のは完璧だな。好感度アップ間違い無し！

「あ．．．ありがとうございます．．．」

「う、うん。」

．．．沈黙。

そりゃそうだ。

会って間もない人と会話が弾むわけがない。

確かにこんな状況だから色々話したいことはある。

しかし、ありすぎて何から喋っていいかわからない。

俺はしばらく考えたあげく、名前が一番無難だと考え、聞いてみることにする。

「あの」「あの．．．。」

．．．かぶった。

ただでさえ気まずいののに更に気まずい状況に．．．

「な．．．何ですか．．．?」

少女が俺とかぶらないように質問してくれた。

正直ものすごく助かった。

「いや、名前を聞くことと思って．．．。教えてくれるかな?」

「え?あ．．．た、立華みすずっていいいます。」

俺は名前を聞かれなかったが一応名乗ることにいた。

「じゃあ．．．みずずさんでいいかな？俺の名前は紅月希。あ、あ
と敬語は使わなくていいよ。」

．．．ちよつと色々言いききたな。

そう思いながらみずずをみると、やはり困惑した顔でこちらを
見ている。

可愛い。

．．．じゃなくて、どうしよう。

すると、みずずが唐突に口を開いた。

「のぞみ．．．ちゃん？．．．女の子ですか！？」

．．．びっくりした。

いきなりそんなこと聞かれるとは正直思わなかった。

確かに俺は希のぞみなんて名前だからよく言われたものだが、

ここまで真剣に驚かれ、なおかつ女であると信じられたのは初めて
だ。

声や容姿でわかるだろ普通．．．。

どうやら俺が出会えたこの女の子は本物の天然さんのようだ。

俺はこの天然少女にやさしく自分の性別を教えてあげることにする。

「いや、俺は男だよ？こんな名前だし言われ慣れてるから気にしな
いで。」

するとみずずは一瞬表情が和らいだかと思うとまた硬い表情となり、
大きく口を開く。

「お．．．男ですか！？な、なんかあやしいです！証拠を見せてく
ださい！！」

また驚かされた。

なんなんだこの子は．．．。

だいたい証拠と言われても何を見せたら．．．

家までこれば学生証か保険証があるが今の俺には触ることもできない。

．．．あとは卑猥なものしか思い浮かばない。

しかし、いくらなんでも初対面の女の子にそんなものを見せる俺ではない。

「な．．．何を見せたらいいの？」

そう聞くとみすずは少し考え、

「え．．．あ、あの．．．。」

と言いながら赤面していく。

やっと俺と同じ思考までたどり着いたのだろう。

俺の想像より天然であることはよく分かった。

ここで俺は気持ちを切り替えて最低限の情報を共有することにした。

「君もこの次元に飛ばされたんだよね．．．？」

「はい．．．。私はこの次元に飛ばされて．．．私だけで．．．友達みんな普通に．．．。」

また泣きそうになるみすずに質問を重ねて涙を止める。

「この場所について何か知ってることはある．．．？」

「いえ．．．ニュースでやってたことぐらいしか．．．。」
だろうな。

まあ期待はしてなかった。

ちゃんとニュースを見てたことすらも驚くほどだ。

「なら状況は同じか．．．どうする？」

みすずは俺の唐突な質問に困惑する。

予想どおりの反応をしてくれたのでちょっと嬉しい。

「ここから二人で抜け出す方法を考えるか．．．また一人に戻るか。」

「ひ．．．ひとりは嫌です．．．。」

言ってるから、”二人でいよう”と言ってるようなのだと気付いたがまあいい。

俺だってまた一人に戻るのなんてごめんだからな。

「じゃあ、とりあえず立てよ。」

俺はそう言っただけで座り込んでいるみすずに手を差し伸べた。

みすずは、「あ、はい。」といいながら俺の手を

握れずに、すり抜けた。

「みすず!?!」

おもわず一歩引いてしまう。

瞬時にみすずを警戒してしまった。

だが、みすずも困惑している

どうやらこの警戒は無駄だったようだ。

．．．確認のためもう一度手を取ろうとするが、やはりすり抜ける。

何故．．．?

何故俺はみすずに触れることが出来ない．．．?

俺はこの事態で、みすずにかけるべき言葉を見つけれなかった。

episode - 4 〔天界〕

天界

ここは、そういう表現が正しいのだろうか。

死者の魂が集い、天使が存在し、神が存在する。

魂といっても、姿かたちは普通の人間と変わらない。

ちよつと透けているが。

そして、天使といつても、容姿はただの少年や少女だ。

羽は生えているが。

神は、一人の女の子。

神らしく着飾っている。

ちなみに、人間の魂もテレパシーのようなもので言葉を伝えることが出来る。

そんな中、俺はそんな神様の横にいる天使だ。

神様の世話をしている。

「天使君」

神に呼ばれた。

多分、距離を考えると今の声が聞こえたのは俺だけなので俺が返事をする。

「なんですか？」

「君はずっと私のお世話してくれてるのに、他の天使君達と同じ呼び方で呼ぶのはやめたほうがいいかな？　っと思って。」

神はそういうと、よく整った顔にどこか悲しみを感じさせる笑みを浮かべた。

俺は、神様が何を言いたいのがよく分からなかったので聞いてみることにした。

「つまり、どういうことですか・・・？」

「だから、君の名前を決めようかな・・・って。嫌かな？」

ここで俺はようやく理解した。

俺はここまでストレートに言われなければ分からないほど鈍感だったのか？

などと考えながら、俺は特に断る理由もないので神に名前を授かることにした。

「嫌などありえません。むしろ、嬉しい限りです。」

俺がそういうと、神は大人びた容姿からは想像できない幼い、無邪気な笑いを見せ、

「よかった！ 実はね、いっぱい名前考えたんだよ？ 君はかっこいいからあ、リックとかマイルとかマミモとかナナとか・・・どれがいい？」

と、目を輝かせていた。

俺はそんな神様の様子に内心微笑みながら、冷静に感想を述べた。

「後半の名前ってかっこいいですか・・・？ 俺のイメージでは少し違うような・・・」

「いいからっ！ どれがいいの？」

正直、神様・・・いや、目の前の少女の可愛さのせいで名前など、

どうでもよくなっているのだがそんなことを言つと怒られるだけだ
ろつ。

だから、俺は一番しっくりきた名前にしてもらつことにした。

「リックでお願いします。」

「じゃあ今から君はリックねっ！ これからもよろしくっ」

このときの神は、心の底から笑つてくれていた。

この笑顔は、俺の記憶の中に存在し続ける

あの時の表情をかき消してくれる気がした

episode - 5 無心

少し、時を遡る。

何年前かなどは気にしていないため、俺は覚えていない。あの時は皆、いつも通り動き、いつも通りの天界だった。そして俺はたまたま神のそばにいた。

しかし、いつもと違うのが起こった。一つの人間の魂が、神の姿を目撃した。

これだけならよくあることだ。

実際、天界にいる人間の魂の2割程は神の姿を見たことがある。だが、その”目撃された少女”が神だと気付いた者は少ない。

天界はそういう人間の魂が集まる場所だからだ。

だから、今回もたいしたことはないだろう。

そう思った。

そんな俺の予想をこの人間の魂は簡単に裏切った。

「あんたが、神様……だな？　俺はあんたに嫌われていたのかね……。」

ただの自分が不幸だったと感じた人間の、冗談混じりの疑問だろう。この瞬間は、俺が特に気にかけることはなかった。だが、すぐ横にいる神の反応に、俺はこの安易な考えを捨てた。

「え……。」

神は驚き……とは少し違う、”無心の感情”の声を漏らす。

その声が俺に届くのと同時に、彼女のきれいな藍色の瞳から表情が消える。

それが、この世界の壊れる合図だった。

そんなこと、現段階での俺は知るよしもなかったが、俺の心は明確な恐怖に覆われていた。

怖い。

単純な感情。

そして、その感情の先にいるのが自分が誰よりも慕っている”少女”であるという
何とも言えないふわふわした違和感。
このもやもやを追い払いたい。

しかし、俺はこの違和感が何なのかを考える暇もなくこの天界に起こった”異常”を目にしまった。

赤い

天界一面が赤い。

一瞬戸惑ったがよく見るとすべて人間の魂だった。
魂は、個々に様々な色をしていたはずだ。

それも、もつと柔らかい色。

もし俺がこの場所に居合わせなかったら状況がつかめなかっただろう。

でも、ついさつき目の前で起こった事態を見ていた俺には容易にこの状況がつかめた。

神にこの世界の調和をするほどの余裕がなくなった。

たったそれだけのことで、ここまで大変な騒ぎになるんだな。

俺がそう思った時には、無意識の内に神である美しい少女を抱き

しめていた。

あまりに突然起こった目の前の事実、意識を半分失いながら……
ずっと……
ずっと抱きしめ続けた……

episode - 6 〈同居〉

「ちよつと狭いけど……大丈夫かな？」

「ああ。これぐらいがちょうどいいさ。」

現在、俺

あかつぎ

のそみ

紅月 希は、さっきこの次元で出会った少女　みすずの住むマンションの一室に来ている。

みすずはこの次元に飛ばされてるので、現在この部屋はみすずの部屋というわけではないのだが、

”次元変動にあった人が住んでいた部屋”というのもあり、住居者はいない。

だから、まだここで暮らしているそうさ。

そして、一番の問題、”どうして俺がみすずの家にいるのか”についてだが……

まあ慌てるな。

「テレビはずっと付きっぱなしだけど……消せないから……」

「俺は全然大丈夫さ。むしろ、情報が入るのは嬉しいことだ。」

「じゃ、じゃあ……改めて、これからよろしくお願いします！」

「ああ、よろしくな。」

この会話で分かってきた人もいるのではないか。
そう、

俺はみすずと同居することになったんだ。

まあ、焦らずここまでの経緯を聞いてくれよ。

数十分前。

俺の手は、みすずの手をすり抜けた。

「みすず!？」

俺は瞬時にみすずを警戒した。

自分に害を与える者かと疑ってしまったからだ。

しかし、みすずも困惑した顔でこちらを見ている。

つまり俺の疑いは間違っていたのだろう。

俺とみすずの間に重い沈黙が降りかかる。

しばらくして、みすずが何か覚悟を決めたように、ゆっくりと口を開いた。

「こんな場所です。二人で抜け出すんですよ……? これからどうしますか?」

みすずの声からどこか悲しさが感じられたが、こんな状況なので特に気にせず、今の出来事ではなくこれからについて話すことにした。「そう……だな。とりあえず、俺は出来るだけ長い時間二人でいたほうがいいと思う。そのほうが色々と安心だと思うんだが……」

みすずはどう思う？」

余談だが、俺はさっきおもわず下の名前ですんでしまったので、これからは下の名前で呼ぶと決意していた。

そんな事を考えていると、またしてもみすずの天然発言が勃発した。

「じゃあ、わたしの家で住みますか？」

……え？

俺は一瞬思考が停止し、目の前の少女の大胆とも言える発言に冷静に返答できなかった。

「あ……あの、え？」

俺がそんな反応をしていると、みすずも自分が何を言ったのか気付いたようで、顔を赤らめながら小さな声で

「あ、迷惑……ですよね。ごめんなさい。」

さすがにこんな態度を取られてはいくら俺でも罪悪感がわいてくる。そこで、咄嗟にこんな言葉をかけてしまった。

いや、実際は”咄嗟に”というよりは、かなり勇気を振り絞っていったのかもしれない。

「みすずがいいなら……その、一緒に暮らしてもいいか？」

この言葉で、俺とみすずの同居が決定した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1182r/>

次元の狭間にてっ

2011年10月8日19時03分発行